

今回は成田山女学校と成田高等女学校の設立についてお話しします。

明治政府は、富国強兵を進める中で産業と政治の近代化をおし進めましたが、民法で戸主権の強い家父長制的な家の制度を存続させました。近代国家は独立した個人が参加することによって成り立っているのですが、急速な変化は社会を混乱させるだけの意見が強かったため、家族に対する戸主の支配権が温存されたのです。戸主は大体はお父さんです。当時は、お母さんが許してくれても、法律上はお父さんの許可がなければ何もできない時代でした。ですから、女子教育は必要とされなかったのです。

しかし、日清戦争の少し前から軽工業を中心に産業が発展するようになると、状況は変わってきました。農業中心の社会から、工業中心の社会へ変化し、人々は労働者として独立した個人になっていきました。このような産業化の進んだ社会では、教育の重要性が高まります。社会の産業化が進むのと、学校教育の発展は深い関係にあるのです。そんなころの明治 26 (1893) 年に、文部省から「女子教育ニ関スル件」と題する訓令が出されました。

普通教育ノ必要ハ男女ニ於テ差別アルコトナク、且女子ノ教育ハ将来家庭教育ニ至大ノ関係ヲ有スルモノナリ。現在学齡児童百人中修学者ハ五十人強ニシテ、其ノ中女子ハ僅ニ二十五人強ニ過キス。今不就学女子ノ父兄ヲ勧誘シテ就学セシムルコトヲ怠ラサルヘキト同時ニ、女子ノ為ニ其教科ヲ益々実用ニ近切ナラシメサルヘカラス。裁縫ハ女子ノ生活ニ於テ最モ必要ナルモノナリ故ニ、地方ノ情況ニ依リ成ルヘク小学校ノ教科目ニ裁縫ヲ加フルヲ要ス

カタカナばかりで読むのが面倒かもしれませんが、歴史の事実はこのような過去の文章によって知ることができます。がんばって読んでみてください。ここでは、政府が女子教育を積極的に進めようとの考えが見えますが、それは、将来の家庭教育のためで、裁縫など家庭生活に欠かせない実用的な教育を施すべき、との目的があったことがわかります。そして、明治 28 (1895) 年に「高等女学校規定」が、明治 32 (1899) 年に「高等女学校令」が出されるにおよび、高等女学校は中学校と同格となりました。そして、各道府県に公立の高等女学校設置が義務付けられ、郡市町村や町村学校組合、さらには私人にも小学校教育を妨げない限りにおいて、という条件付きで高等女学校の設置が認められました。こうして、明治 33 年に県内最初の県立高等女学校（今の県立千葉女子高等学校）が当時の千葉町に創設されました。

しかし、その後千葉県内では、高等女学校の設置が進まなくなりました。一方で、私立の裁縫学校は各地に次々と設立されました。やはり、一般的な理解が広まらなかったのでしょうか。困った県は成田中学校を県立の高等女学校にしてしまおうとしましたが、これは結局断念せざるをえませんでした（詳しくは成高ヒストリーその4をご覧ください）。

成田山女学校は、明治 41 (1908) 年 2 月 21 日に、千葉県知事より設置が認可されたことに始まります。それは、ひょんなことから始まりました。今の成田市立成田小学校は、明治 6 (1873) 年に寺台の永興寺に設置された東谷小学校を前身とし、翌年に今の附属小学校のある場所に移されて、成田小学校と改称しました。その後、明治 19 (1886) 年の教育令改正にともなって尋常小学校と高等小学校に分けられ、明治 37 (1904) 年に尋常小学校のみ、現在地に移りました。高等小学校はそのまま残されて

いましたが、町の財政負担が重くのしかかり、ついには廃校論が出るなどして、町議会が紛糾したのです。町会議員で成田中学校の理事であった三橋金太郎は、成田山新勝寺の石川照勤貫首に相談し、2棟ある校舎のうち、新勝寺が1棟の移転費用を負担する代わりに、残りの1棟と隣接する町の公会堂を譲り受けて新たに女学校を設立する、ということに決まったのです。町にとっては小学校の維持費用が軽減された上に移転費用が節約され、かねてから女子教育の必要性を説いておられた石川貫首にとっても女子教育の場が実現できたわけですから、一挙三得の妙案といえるでしょう。

公会堂とは、成田中学校の設立に力を尽くされた石川正英・三橋金太郎・諸岡勝太郎らの努力によって、明治 25（1892）年に建てられた集会場でした。もともと、自由民権運動が盛んな土地柄だったようで、前年に板垣退助らを招いて演説会が催されるほどでした。そのような演説会を開く目的で建てられたのです。この入り口には、朝鮮の改革派で独立党の首領であった、金玉均の筆による「公会堂」の額が掲げられていました。金玉均は明治 17（1884）年のクーデターに失敗し（いわゆる「甲申事変」のことです）、日本へ亡命中でした。そのころに、親交のあった諸岡勝太郎との縁で書かれたものです。もともと、日本の民権運動家は、朝鮮や清国の改革・革命運動に深く関わっていましたので、そのようなつながりがあったのでしょう。公会堂は明治 39（1906）年に成田幼稚園へ遊戯室として移築されたため、この額のみが高等女学校に受け継がれて、現在は本校に保管されています。



こうして、成田山女学校が今の付属小学校の場所でスタートしました。修業年限は3か年、授業科目は国語や英語のような一般的なもののほかに、家事・編物・裁縫・刺繍・造花・生花の授業がありました。明治 43（1910）年の生徒数は64名で、1年が22名、2年が14名、3年が28名でした。この時の3年生が成田山女学校の1回生にあたり、開校当初から病気や家事都合といった理由で20名が退学していました。



(写真は成田高等女学校のものです)

開校当時の様子については、次のような話が残されています。

当時小学校は、尋常科が4年、高等科は2年制でした。この高等科も近隣の町村にはどこにもないらしく、成田まで1里、2里と歩いて通ったものでした。ですから女性で高等科まで進学する人は、親も本人も勉強好きの人に限られたように思われます。従って、女学校などは全く夢に見るくらいのところ、県立千葉高女へ進学する人などは、町にほんの1人か2人でした。あとは精々裁縫を習ってあきらめる程度でした。さあ、成田に女学校ができた。ここへ集って来た娘たちは、何年か前に高等科を卒業した者、やっと今年尋常科を卒業した者といった様子で、年齢も体力も実にまちまちな娘達が50人ほどであったと記憶しています。それはちょうど、姉妹で机を並べて勉強しているようでした。

当時は女子が勉強をする機会がほとんどなく、各地にできた裁縫学校で我慢するしかなかったのですが、成田に女学校ができたことで多くの少女たちが向学心を大いに刺激されたようです。しかし、2年目になるとその熱もやや冷めたようです。そのことについては、次のような話が残されています。

関東の霊場、お不動様のおひざ元、ここ成田の町に、電灯がつき、電車が走り、電話がひかれて、文化生活が始まる。これと相前後して女学校が誕生したのは、明治41年、ちょうど私達が小学校の6年になった時、それまでは県立千葉高女に行くより道はなかったのです。それでわたくしなども千葉へ行くつもりでその準備を始める覚悟で6年生になったのです。幸い成田に女学校が出来たので、翌年4月、第2回の生徒として入学しました。どんなに入学志願者があるのであろうと、その日が来るのを待ちわびていたのですが、その日になって驚きました。たつた十何人とは。(中略) それもその筈、当時女学校に行くものは、学校の先生になる人か、それ以外は特別な人でなければ必要ないくらいに思われた時代らしかったのです。

成田の町は東京近郊の手ごろな参詣地として大いに賑わっていました。町を一步出れば昔ながらの農村の風景が広がっていたのですが、町の中には電燈がつき、電車が走り(今の「電車道」と呼ばれているところを、明治43年から成宗電車が通っていました)、電話が通じており、東京で広がり始めた生活様式が、ここ成田では見られたのです。佐原が江戸情緒を今に伝えているところから「小江戸」と呼ば

れましたが、それにならっていうと、「小帝都」というのがふさわしいかもしれません。「文化」という言葉の響きは、洗練された都市生活を連想させ、希望ある未来を予感させるものでした。このころの成田は、時代の先端を行く町だったのです。しかし、町を一步出れば田園風景が広がり、農業が主要な産業でした。ですから、求められるものは家庭生活を営むのに必要な実学であり、上級学校に進学するための科目は不要と考える親がまだ多かったことでしょう。女子教育の必要性に対する世間の認識はまだ低かったのです。

さて、高等女学校の設立がなかなか進まなかった明治 30 年代に対して、成田山女学校が設立された明治 41 (1908) 年には県立東金高等女学校、同 42 (1909) 年には安房郡立高等女学校、同 43 (1910) 年には香取郡立高等女学校と君津郡立木更津高等女学校と、公立の高等女学校の設立があいつぎました。成田山女学校は 3 年制でスタートしましたので、明治 44 (1911) 年 3 月には最初の卒業式となりますが、これを機に 4 年制の高等女学校に改組し、ついでにこの最初の卒業生をそのまま 4 年生に編入させることにしました。こうして、明治 44 年 1 月 19 日に文部大臣へ設立の申請を行いました。2 月 13 日に早くも認可されました。これには、成田中学校の経営についての実績や、当時文部省で国定教科書の編集官をしていた喜田貞吉元校長の口添えがあったものと考えられています。



(成田山女学校の最初で最後の卒業生です)

入学試験や編入試験を実施した結果、第 1 学年が 37 名、第 2 学年が 24 名、第 3 学年が 13 名、第 4 学年が 10 名でスタートしました。各学年ともに学年相当の年齢以上の生徒がいました。中には茨城県・東京府・大阪府など遠方の尋常小学校出身者もいました。こうした遠隔地や当時の交通事情により通学が困難な生徒のために、学校は大正元年ごろに今の成田市の土屋に民家を借り受けて、寄宿舎を設けました。寄宿生は全体で 3 組に分れ、炊事番・整理番・風呂番を 1 週間で交代して共同生活を送りました。特に風呂番は大変で、風呂桶につるべ 40 杯の水を汲み入れ、湯加減に注意しながら火を焚かなくてはなりません。今の時代のように、スイッチ・ポン、でお風呂が沸くわけではありません。シャワーだってもちろんありません。火の後始末から、焚き付けの材料集めまで自分たちでやらなくてはなりません。私たちは便利な生活があたり前のようになっていますが、そのように考えると、私たちのこの便利な生活が、色々な人々によって支えられていることに、改めて感謝の気持ちがわいてきてしまいました。

今回はここまでとします。

(深田富佐夫)